

〔考 察〕

今日まだ筋疾患の診断に筋電図法が決定的な手段とならないが、筋線維との間で、一般に次のようなことがいわれている。即ち、Pulse の振巾や高さは筋線維の大きさや密集の移度によって異なり、また各線維の spike の同期性にも影響される。また、Pulse の発生間隔や持続時間は筋力の発現と関係があるともいわれ、収縮が弱いと間隔が変動し、強いと変動が少ないという。この様に、筋活動時の波形分析からある程度、筋線維の状態を知ることが可能である。

今回得た結果と、Lenman をはじめ、他の PMD 患者を対象とした四肢筋における筋電図上の所見や、湊の病理学的所見、あるいは浜田らの咬合圧と咀嚼筋筋電図の報告などから推察すると顔面領域においても、四肢筋同様に、筋線維の一部消失に伴う筋機能の障害が現われていることが推察される。

しかしながら、四肢筋と異なり、その臨床症状があまり早期から著明に現われていないのは、咀嚼、発音などの口腔機能に關与する運動が比較的末期まで残るためであろう。これらの点については、さらに経年的な変化を検討することで、本症患者の咀嚼機能の実体をより明らかにできるものとする。

20. 進行性筋ジストロフィー症患者における咬合形態 と口腔機能との関連に関する累年的研究

弘前大学医学部

木 村	恒	矢 野	文 雄
森 山	武 雄*	石 川	富三郎**
亀 谷	哲 也**	三 條	勲**
田 中	誠**	長 島	明**
三 浦	廣 行**		

(*岩木療養所，**岩手医科大学歯学部)

進行性筋ジストロフィー症患者の示す特異的な齒列咬合の形態異常については、既に51年度調査で報告した。とくに、顎、顔面頭蓋の成長發育については、口腔周囲の軟組織の影響を受けていることが推察された。今年度はその関連性についての調査を行なうために顎、顔面の形態的变化を主眼におき累年的に研究を進めるための第一歩とした。

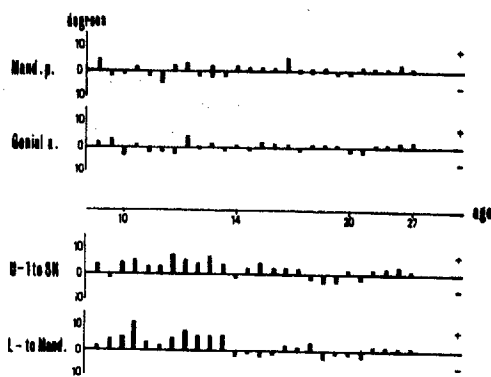
〔方 法〕

岩木療養所に入院中のPMD患者について、口腔内診査、口腔内写真の撮影、口腔模型の作製及び頭部X線規格写真の撮影を行なった。とくに今年度の調査では Duchenne 型男子26名について、顎、顔面頭蓋の一年間の変化を頭部X線規格写真上で検討した。頭部X線規格写真の計測は通法によって、角度的、量的計測を行ない51年度に得ている結果と比較検討した。

〔結 果〕

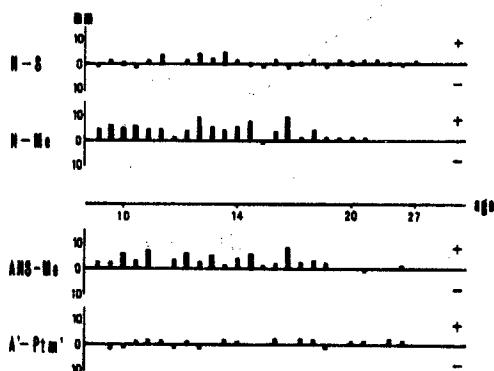
個々の症例毎に形態的な検討を行なったが、一カ年間隔においての変化量は僅かであった。しかしながら、開咬傾向を示した特異的な形態を有する患者は、増令的にそれが悪化している。これからの Skeletal Pattern に現われた異常は、とくに下顎骨において強い。この下顎の發育方向と形態は、14才頃までは個々の例では異なりを示し、一定の傾向がなかった。14才以上の症例では増令的に下顎角 (Gonial angle) の開大が認められ、下顎下縁 (Mandibular Plane angle) は全体に下方位を示していた。下顔面高 (ANS-Me) が増大するため、前顔面高 (N-Me) が増加し、オトガイの下方位が認められた。また Dentture Pattern に現われる変化のうち、上下顎前歯歯軸は、14才以下の例では、唇側傾斜を示しているがその後の年令群のものは、舌側傾斜が示されていた。

図 1



1976 - 1977

図 2



1976 - 1977

一年前に正常な前歯被蓋を示していた患者の中で、over bite の減少、即ち被蓋の浅くなったものは26名中5名に認められた。これらのものは年令的にはいずれも14才以下であった。その変化については図3に示した。前年度既に開咬の患者であった10名のうち14~17才までの症例ではその異常が更に悪化していた。その変化を図4に示した。これらの下顎骨の發育方向はとくに、後下方に向っており、その代償として下顎前歯歯軸の舌側傾斜が強く現われていた。

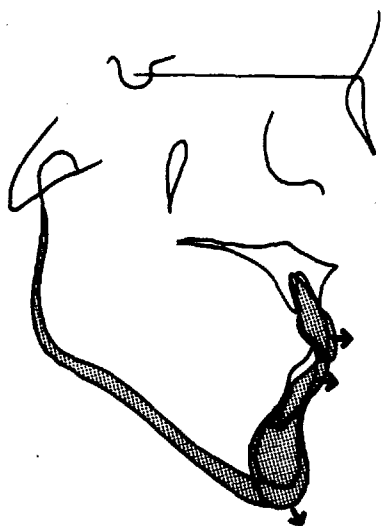
〔考 察〕

本調査でのPMD患者群について歴令14才頃までは、比較的正常に近い顎、顔面頭蓋の成長発

育が認められているが、その後年齢が高まるにつれて、下顎の位置及び形態に強い変化がでてくる。とくに開咬を示す患者でその傾向が強かった。このことは、口腔周囲筋群の障害が、顎、顔面の骨格系の成長発育に強く影響するものと推察される。この点を更に今後の累年的な調査から追求をしたい。

また、顎、顔面頭蓋の異常を全身的な障害度の進行と関連づけて検討を進めてゆく必要もあるう。

図 3

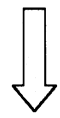


1976 - 1977

図 4

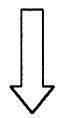


1976 - 1977



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



進行性筋ジストロフィー症患者の示す特異的な歯列咬合の形態異常については、既に 51 年度調査で報告した。とくに、顎、顔面頭蓋の成長発育については、口腔周囲の軟組織の影響を受けていることが推察された。今年度はその関連性についての調査を行なうために顎、顔面の形態的变化を主眼におき累年的に研究を進めるための第一歩とした。